

## 『まるごと 日本のことばと文化』を主教材とした 専門日本語研修のコースデザインと成果

羽太園・野畑理佳・東健太郎・戸田淑子・安達祥子

[キーワード] 『まるごと 日本のことばと文化』、専門日本語研修、コースデザイン、  
口頭運用能力、課題遂行

### [要 旨]

国際交流基金関西国際センターで実施している外交官・公務員日本語研修では、これまで主教材として『みんなの日本語』を使用していたが、コース目標とカリキュラムのずれ、レベル差の拡大による学習ストレス、日本文化社会理解のシラバスの偏りなどの問題から、平成27年度より『まるごと 日本のことばと文化』(以下『まるごと』)を使用することとした。主教材変更之际には、本研修参加者の多様な背景や学習能力などをふまえ、①職業的な知識や経験の利用、②レベル差への対応、③文法を重視する学習者への対応、の3点に留意してコースデザインを行った。研修の結果、成績下～中位レベルの口頭運用能力の向上、ストレスの軽減、コミュニケーションへの積極性などの変化が明らかになったが、上位レベルのカリキュラムには課題が残った。

### 1. はじめに

国際交流基金関西国際センターでは、1997年の開所以来、諸外国の外務省若手職員および政府・公的機関の若手職員を対象に、外交官・公務員日本語研修を実施している。例年、参加者は外交官約30名、公務員約10名で、多国籍(アジア、アフリカ、中南米、中東欧、中東)であり、年齢は20代後半～30代前半が中心を占めている。来日時は大半が日本語未習者で、8ヶ月の研修終了後、在京大使館あるいは自国で日本関連の業務につくことを期待されている。本研修は、①生活と業務に必要な日本語能力および継続学習の基礎となる日本語能力を習得する、②日本についての一般的な知識を深める、という2点を目標としており、従来『みんなの日本語』を主教材に、スピーチや専門語彙などの専門科目を組み合わせるコースデザインを行ってきたが、平成27年度より主教材を『まるごと 日本のことばと文化』(以下『まるごと』)に変更した。本報告では、主教材変更の背景と、『まるごと』を利用した専門日本語研修のコースデザインおよびその結果について報告する。報告対象となる研修は、平成27年度外交官・公務員日本語研修で、平成27年9月15日から平成28年5月12日まで約8ヶ月間実施された。

## 2. 主教材変更の背景

### 2.1 外交官・公務員日本語研修の問題点

本研修は、生活や業務に必要な日本語能力の習得が期待されており、入門から8ヶ月で一定の成果をあげるために、選択科目システムや自律学習支援などコースデザイン上の工夫を行ってきた(上田・羽太・和泉元2001)。しかし、多国籍の参加者の中には環境に適應するのに時間がかかったり、外交官であっても外国語学習経験の少ない者もあり、研修初期からレベル差が大きく、研修後半にはクラスによって進度や教材を変えるなど、コースは複線化していた。そのため成績下位のクラスでは、学習意欲が維持できないなどの問題が生じていた。

また、本研修は外交官・公務員のニーズをふまえ口頭運用能力の養成を重視しているため、主教材の『みんなの日本語』に加えて会話やスピーチなどの科目を設置し、口頭運用能力の強化を図っていた。しかしカリキュラム全体としては、主教材の学習つまり文型の理解と運用練習にける時間が長く、コース目標との齟齬が生じていた。特に下位のクラスでは、文型理解に手一杯で運用練習さえ手薄になり、それがレベル差の拡大にもつながっていた。これまでのコースアンケートやチュートリアル記録を見ると、研修初期には「文法の進度が早い」「語彙がたくさんあって大変」、また中期には「文法がむずかしい」という声が多く、そのころ冬場にさしかかることもあって雰囲気も沈みがちとなる。終了時アンケートでの満足度は高いが、研修期間中はかなりストレスを抱えている様子が観察されている。

また、本研修では「日本についての一般的な知識を深める」ことも目標の一つになっているが、これまで文化理解のプログラムは政治経済等についての講義と体験学習が中心であり、生活に密着した文化について学んだり考えたりする機会は不十分だった。

### 2.2 『まるごと』導入の理由

『まるごと』は、主に海外の一般成人を学習者として想定し、実利的な目的だけでなく、外国語学習を楽しみたいという動機に応えることを目指している。そしてJF日本語教育スタンダードに準拠し、日本語を使って何がどのようにできるかという「課題遂行能力」と、さまざまな文化に触れることで視野を広げ他者の文化を理解し尊重する「異文化理解能力」の養成を教材の目的においている(来嶋・柴原・八田2012)。本研修の場合も、参加者は成人学習者であり、留学や就職、試験合格などが目的ではない。また外交官・公務員にとっての最大のニーズは、日本人との社交や、日常生活を円滑に送ることであり、そのためには、課題遂行と異文化理解を目標とした『まるごと』のシラバスはニーズに合致している。また、文化理解と言語学習を有機的に結びつけてカリキュラム化できるという利点もある。

また、A1段階はローマ字が併記されるため、レベル差拡大の一因ともなっていたかな学習の負担が軽減される。さらに入門段階から何らかの課題ができる実感が得られるので、研修初

『まるごと 日本のことばと文化』を主教材とした専門日本語研修のコースデザインと成果

期のストレスが軽減される。そして各課で課題遂行に必要な言語要素が提示されるので、語彙や文型が定着しない場合でも、最低限のレベルで課題達成が可能になるのではないかと思われた。このように本研修の問題点を解決し、コース目標により合致したコースデザインを目指して、平成27年度から主教材を『まるごと』に変更することとした。

### 3. 『まるごと』を主教材とした専門日本語研修のコースデザイン

#### 3.1 コースデザイン上の留意点

『まるごと』を主教材とするにあたっては、職業人を対象とする専門日本語研修であることや、学習者の背景から、コースデザイン上いくつかの留意すべき点が浮かび上がった。まず、外交官・公務員としての知識や経験、能力をどのように活用するかという点である。羽太・上田(2008)は関西国際センターでの専門日本語研修の経験から、初級段階でも「専門性の導入によって学びやすさや学習効果につながる」としており、スピーチなど業務に直結する科目だけでなく、一般的な日本語を学ぶ『まるごと』のクラスでも、外交官・公務員にとってなじみのある活動や場面を取り入れていくことが効果的だと思われた。また、『まるごと』は課題遂行(Can-do)を目標にシラバスが構成されているが、本研修には文型シラバスや文法重視の言語教育を受けてきた参加者も多く、Can-doシラバスによる学習にスムーズに入っていくためには何らかの工夫が必要だった。さらに、『まるごと』を使用してもやはりレベル差は生じるため、下位レベル、上位レベル双方への対応を考慮しておく必要があった。このような点に対応すべく『まるごと』を主教材とした専門日本語研修のコースデザインを行った。

#### 3.2 コース目標

コース目標である「生活と業務に必要な日本語能力と、継続学習の基礎となる日本語能力」を、より具体的な課題として以下のように設定した。

- ① 日常的な場面でのやりとりや、身近な話題についての情報交換ができる
- ② 業務に関連する限定された場面で、短い社交会話ができる
- ③ 自国について短いプレゼンテーションを行い、簡単な質問に答えられる
- ④ 研修終了後、どのように勉強すればよいか考えられる

『まるごと』を初級2(A2)まで使用することをふまえ、A2+αのコミュニケーション言語活動を目標として①～③を設定したほか、継続学習につながる目標として④を設定した。

### 3.3 コースの流れ

上記目標を達成するため、「一般的な日本語と異文化理解」「専門日本語」「Information & Communication Technology (ICT)」「自律学習支援」「日本文化社会の理解」「交流とネットワーク」に関して、表1のような科目や活動を設定した。大きく変更したのは、表1の「一般的な日本語と異文化理解」のためのカリキュラムである。

表1 平成27年度外交官・公務員日本語研修コース概要

	1学期 (9-11月)	2学期 (12-2月)		3学期 (3-4月)
カテゴリー	科目 △は選択科目			
一般的な日本語と異文化理解	「サイババル日本語」	「活動」「理解」「漢字」 「生活と文化」 ※『まるごと 初級1』使用		「活動」「理解」「漢字」 「生活と文化」 ※『まるごと 初級2』使用
	「活動」「理解」 「かな漢字」 「生活と文化」 ※『まるごと 入門』使用	「スピーチ1」 「語彙」 「日本語バラエティ」		
専門日本語			「スピーチ2」 「専門語彙」 「社交の日本語」 「日本のニュース」△	「プレゼンテーション」 「専門語彙」△ 「社交の日本語」 「日本のニュース」△
ICT	「ICT」(タイピング、情報検索、発表資料作成、学習サイト紹介など)			
カテゴリー	その他のプログラム、教室外活動など			
自律学習支援	オリエンテーション チュートリアル	ポートフォリオ (PF) 紹介 チュートリアル PF 作成、自己目標設定		調査実習 チュートリアル PF 作成、自己評価 今後の学習計画作成
日本文化社会の理解	省庁・関係機関訪問、社会文化講義、見学、文化施設訪問、研修旅行、伝統文化体験			
交流とネットワーク形成	関係省庁担当者との 面談、大学生交流会	会話パートナー ホームビジット		訪問先での交流会 感謝祭

まず主教材の『まるごと』は、入門 (A1) から初級2 (A2) までを使用し (初級2は18課中12課分を抜粋して使用)、「活動」「理解」「漢字」「生活と文化」の各科目を設定した。2学期前半には、レストランや交通機関など実生活に必要な会話を学ぶ「日本語バラエティ」、感情表現や一般語彙を強化する「語彙」、自身の経歴や生活の比較などについてメモを見ながらまとまった話をする「スピーチ1」の3科目を設定し、『まるごと』の内容と合わせて日本での生活や日本人との交流など研修生活に役立つカリキュラムを作成した。

2学期後半からは従来の専門日本語科目である「スピーチ2」「専門語彙」「社交の日本語」のほか、日本のニュースを知り、キーワードを学ぶことを目的とした「日本のニュース」を選

『まるごと 日本のことばと文化』を主教材とした専門日本語研修のコースデザインと成果

択科目として新設した。また ICT クラスを全研修期間にわたって開講し、タイピングや自習のためのウェブサイト紹介、日本事情紹介などを通じて各科目の学習をサポートした。

その他、日本文化社会理解のプログラム、交流プログラムは従来と変わらず実施した。会話パートナーやホームビジットなどの交流プログラムは、教室で学んだ日本語を実際に使ってみる機会となった。そして研修の総仕上げとして、日本人の聴衆を招いた感謝祭を行い、全員が自国の地理、民族、宗教、観光、および二国間関係などについてスピーチと展示によるプレゼンテーションを行った。

表2 時間割例（2学期後半）

	月	火	水	木	金
9:00-9:50	「活動」	「活動」	「活動 チャレンジ」	「スピーチ」	「ICT」
10:00-10:50					
11:00-11:50	「漢字」	「漢字」	「生活と文化」	「専門語彙」	集会
1:20-2:10	「理解」	「理解」	「理解 チャレンジ」	「社交の日本語」	社会文化講義 見学、訪問など
2:20-3:10				「日本のニュース」	
3:20-4:10	チュートリアル（1～2週間に1回、30分）				

※網掛けした科目は『まるごと』を使用

### 3.4 『まるごと』関連科目の構成と狙い

『まるごと』を使用した各科目は、基本的にテキストに沿ってカリキュラムを作成したが、3.1で述べたように、①職業人としての経験や知識の活用、②文法を重視する学習者への対応、③レベル差への対応を念頭に置きつつ『まるごと』の使い方についてカスタマイズを行った。

#### 3.4.1 準備段階

『まるごと』を使用する科目ではないが、『まるごと』に入る準備段階として、研修開始時に3日間の「サバイバル日本語」を行い、自己紹介や簡単な場面会話などを通じて、名詞文、形容詞文、動詞文をごく簡単に紹介した。これは、来日直後の活動に役立つという目的の他に、日本語の全体像をざっと見せておくことで、文法にこだわるタイプの学習者も Can-do シラバスによる学習に入りやすくする意図があった。またこの期間中に、かなも集中的に練習した。

#### 3.4.2 『まるごと』1トピックの流れ

『まるごと』は、かつどう編とりかい編、2種類の教材がある。両者はトピックや主な学習項目を共有しており、かつどう編は Can-do で表されたコミュニケーション言語行動を目標と

し、りかい編は同じ Can-do につながる文法・文型・語彙・漢字などを理解し使えるようになることを目標としている。各トピックは2つの課で構成されている。本研修では表3のように、1トピックを3日で学習することとした。1日目と2日目の午前はかつどう編、午後はりかい編を使用して、2日間で2課分を終了した後、3日目に1トピック分のまとめを行うチャレンジデーを設けた。「活動チャレンジ」ではかつどう編の課題をより実践的な形で復習し、「理解チャレンジ」ではりかい編の文法、語彙の復習と作文、読解などの運用練習を行った。またチャレンジデーは、研修が進むにつれて大きく広がる日本語レベル差のクッションでもあった。学習が遅れがちなクラスでは、積み残した課題の練習や復習の時間となり、学習能力の高いクラスではより応用的な活動を行う時間となった。

また、りかい編に含まれる「漢字」は独立した科目とし、テキストのほか学習支援サイト「まるごと+（まるごとプラス）」や自主制作教材を使用して導入・練習を行った。またかつどう編に含まれる「生活と文化」も独立した科目とし、各トピックのテーマを中心に、クイズやディスカッションなどを取り入れた授業を行った。

3日目の「活動チャレンジ」の後に、課題の達成度を自己評価する Can-do チェックの記入を、「理解チャレンジ」の後に、言語構造の理解度を自己評価するにほんごチェックの記入を行った。そして「生活と文化」の授業後に文化的な気づきについて記述し、Can-do チェック、にほんごチェックとともにポートフォリオに保存した。

なお、上位レベルの1クラスは学習のスピードが速いため、ニーズに応じて2学期よりチャレンジデーにトピックに関連づけた読解や文法学習などを行ったほか、3学期は標準クラスでは使用しなかった『まるごと 初級2』の6課分と『まるごと 初中級』から2課分を抜粋して使用した。

表3 『まるごと』1トピックの流れ

授業時間	1日目(奇数課) 2日目(偶数課)	3日目(2課分)	
午前	1・2限 (100分)	「活動」 かつどう編の課題	「活動チャレンジ」 かつどう編の課題の復習と応用、教室外活動の準備 自己評価(2課分の Can-do チェック)
	3限 (50分)	「漢字」 りかい編の漢字の導入、練習、 クイズ	「生活と文化」 トピックに沿った日本事情の紹介、各国事情の共有、 文化的気づきの記述
午後	4・5限 (100分)	「理解」 りかい編の文字と言葉、会話と 文法、会話、作文の導入	「理解チャレンジ」 りかい編の読解、作文の推敲と共有、文法と語彙の 復習、文法の整理、応用読解、自己評価(2課分の にほんごチェック)

※1学期は漢字数が少ないため、活動110分、漢字40分とし、2学期より上記の時間数とした。

### 3.4.3 各科目のデザイン

#### 1) 活動

表3に示す通り、午前の「活動」クラスでは1日目に奇数課、2日目に偶数課へと進み『まるごと』1トピック分のクラス活動を終える。学習者は午後に「理解」クラスで文法のポイントを学習することがわかっているため、新しい文法項目や表現があっても混乱することなく各課の目標である課題に集中することができた。1トピックの学習が終わる2日目には、宿題として3日目の「活動チャレンジ」に行う予定のロールプレイや発表などの準備シートへの記入を課した。「活動チャレンジ」では以下①②に留意しクラス活動を行った。

#### ① 現実世界（リアル・ワールド）に近づけるための工夫

1、2日目に各課を学習した段階では、まだ十分にアウトプットに自信が持てない学習者も多い。そのため3日目も再度目標となっていた課題にチャレンジするが、まったく同じ内容を繰り返すのではなく、写真や地図などの小道具や当該研修の施設やスタッフなどを利用して、よりリアルな場面に近づけてのアウトプットを目指した（表4）。学習者にとっては現実のモノ、人、場所というリソースを活用することで強い動機付けが生まれ、会話が発展し学習がすぐに外の世界につながるということを意識できる場となったと言える。

表4 「活動チャレンジ」の課題例

レベル	各課の課題	「活動チャレンジ」の課題
入門 3課	名刺交換をして自己紹介する	日本人スタッフと名刺交換パーティーを行い、業務の担当を含めた自己紹介を行う
入門 8課	家の中を案内する	関西国際センターを案内しながら、各種施設について簡単に説明し、案内ビデオを作成する
初級1 12課	よく知らない食べ物について話す、味についてコメントする	たこやきパーティーを企画し、さまざまな風味のたこやきを試食しながら中身や味について聞いたり話したりする
初級1 16課	アンケートの結果を簡単に話す	自身で作成した簡単なアンケートを日本人スタッフに行い、アンケートの結果をクラスで共有する
初級2 5-6課	観光地について話す、旅行先についてアドバイスする	自国の観光ツアーを企画してちらしを作成、ブースに展示し質疑応答をしたのち、一番行きたくなったツアーに投票する

#### ② 外交官・公務員の経験や知識を活かした活動

『まるごと 初級2』では、「活動」「理解」とともに自国の料理や名所、有名人などについて短い発表をするなど、自国について発信する課題が多くなる。こうした課題は業務に直結するもので意欲も高いため、視覚資料を使いながら質疑応答も含め一人ひとりが発表する時間を

十分に確保した。また旅行のトピックでは自国の観光ツアーを企画して宣伝するイベントを行うなど(表4)、職業的な経験が活かせる活動を行った。

こうした3日間の流れから得られた最大の成果は、レベル差への対応が可能になったという点である。参加者間の日本語レベル差は見られたが、「活動チャレンジ」の課題は各クラスのレベルに応じた質的な差を許容する内容であった。下位レベルの学習者にとっては繰り返し各課の目標となるアウトプットを練習する時間が増え、上位レベルの学習者には自身で工夫し発展的な会話に取り組む時間となった。これにより、レベル差はあっても共通の課題にチャレンジし、個々に「できた」という達成感が得られる機会になったと言える。

## 2) 理解

午後の「理解」クラスでは、1、2日目はテキストに沿って文法と語彙の学習を行い、文法の練習問題と作文を宿題とした。3日目の「理解チャレンジ」では、文法と語彙の復習と、2課分の読解と作文の発表を行ったほか、1学期に2回程度、文法の整理を行った。「理解チャレンジ」では以下の点に留意した。

### ① 入門(A1)段階での作文、読解の重視

入門(A1)段階では、文法も複雑ではなく時間的に余裕があるため、作文と読解を重視した。宿題とした作文は、教師がチェックした部分を学習者自身が添削した後、グループ内で直し読みあるいは口頭で発表した。初期段階から短くてもまとまった内容を表現できるため、皆熱心に取り組んでいた。また、『まるごと』の読解問題以外に、各トピックに関連して看板やちらしなどのレアリアを使用した読解教材を使い、より現実に近い読む活動を行った。

### ② 初級(A2)段階でのレベル差への対応

2学期からは「活動」「理解」クラスとも能力別クラスとしたので、チャレンジデーにはレベルによって異なるクラス活動を行った。下位～中位レベルは全クラス共通の宿題である文法練習や作文を時間をかけて丁寧に復習、フィードバックし、文法や語彙の理解、定着を補った。上位レベルは、1、2日目に通常のクラス活動とテキストの読解を終え、チャレンジデーには自主制作教材を使用した読解と文法練習を行った。読解は、『まるごと』のトピックに関連するやや長めのテキストを作成し、要点や情報を読み取る活動を行った。また同じくトピックに関連して新しい文法項目や語彙を導入し、簡単な運用練習を行った。

### ③ 文法の整理

『まるごと』では、文脈と切り離した文法、文型の学習は行わないが、学んだ文法、文型を整理して理解し、文法を体系的に学んでいくことも必要である。そこで理解チャレンジの時間を使い、課をまたいで文法の整理を行った。入門段階では、名詞文、動詞文、形容詞文の確認、初級段階では動詞の活用形を作る練習や、活用形を使った表現の整理などを行った。



『まるごと 日本のことばと文化』を主教材とした専門日本語研修のコースデザインと成果

「理解」クラスは、「活動」よりもさらにレベル差が顕在化しやすいが、「理解チャレンジ」のクラス活動を調整することで、コース終了時まで『まるごと』を同じ進度で進むことができ、下位レベルでも挫折感を味わうことなく最後まで前向きに学習に取り組めた。また定期的に文法を整理することで既習項目を繰り返し確認することができ、文法理解に役立ったと思われる。

### 3) 漢字

『まるごと』に出現する漢字語彙を対象に、書くことは要求せず、漢字語彙を認識して、読める、あるいは意味がわかることを目標にクラス内容を構成した。『まるごと』には漢字語彙を含む文を読む練習があるが、漢字語彙の認識と読みを強化するため、独自のテキストを作成した。テキストの構成は、①漢字語彙の読み方、②書いて覚えない学習者のためのシート、③漢字語彙を含む文を読む練習、④まとめの練習として文脈の中で漢字を使うタスクである。各タスクは、入門レベルでは、絵と漢字語彙のマッチングや会話を読んで適当な漢字語彙を選ぶ問題、初級レベル以降は少し長い読み物を読んで適当な漢字語彙を選ぶ問題などを取り入れた。入門段階からレストランのメニューや駅の構内表示などを練習問題に取り入れるなど、現実世界に結びつけられるよう工夫した。

クラスでは、「まるごと+」のメモリーヒント<sup>(4)</sup>などを使って、漢字の意味と読みを確認し、その後、漢字語彙を含んだ文を読む練習、自作テキストの文脈の中で漢字を使うタスクなどを行った。また各トピックごとに簡単なクイズを行った。

『まるごと』を利用した漢字学習の良さとして、活動クラスで十分に口慣らしした語彙を漢字に置き換えて学ぶため、新しい漢字を覚える上に意味も覚えなければならないという負担がかからず、参加者の負担が少ないことがあげられる。また、書くことが要求されないため、漢字に対する苦手意識が見られなかった。さらに、自作テキストでは実生活に即した素材を使用したため、紙幣に印刷されている漢字や、駅構内の表示、レストランのメニューなど、実際の生活の中で目にした際に「わかる」という達成感を得ていたようだった。自習に関しては、「まるごと+」のメモリーヒントや練習問題が積極的に使われていた。

従来は主教材とは別に自作テキストで漢字学習を進めていたが、今年度は『まるごと』に沿って行った結果、学習する漢字数が減った。そのため一部の参加者からは「もっと漢字を勉強したい」という声もあったが、苦手意識が減ると同時に自習のための支援が得られることで学びやすさが増したことは利点だと言える。

### 4) 生活と文化

表3のように、1トピックを終えた3日目に「生活と文化」クラスを行った。クラスでは、各トピックのテーマに沿った日本事情の紹介と、研修参加者による各国事情紹介及びディスカ

セッションを活動の中心に据えた。クラスは全員が大教室に集合し、毎回ランダムに6人程度のグループに分けて、さまざまな国の参加者同士が情報交換を図れるようにした。また、テーマに関して深く理解し活発な意見交換ができるよう、クラスは基本的に英語で行い、研修の経過に伴って日本語を部分的に用いるようにした。

授業では表5の授業例のように、トピックに関するデータや写真、動画などの情報を提供したほか、和室体験やゲストスピーカーを招く等、日本国内のリソースを活用するよう心がけた。また、8ヶ月間の長期滞在型研修の利点を活かし、1学期は日本についての基礎的な知識を得ること、2学期以降は自国と比較・分析すること、2学期後半から3学期にかけては滞在中に得た経験をふまえたディスカッションに重点を置いて授業を構成した。また、最終クラスでは、滞在中に見つけた「自分の国に紹介したいクールジャパン」の発表を行った。

表5 『まるごと 入門』トピック7「日本のまち」の授業例

- 1) テキストの写真を見て、トピックを確認し、自国にもあるか考える
- 2) 日本の安全と利便性に関する動画を見る
- 3) クイズ「日本のコンビニの店舗数」をグループで推測する
- 4) 日本で見つけたおもしろいサービスについてグループで話し合い、全体で発表
- 5) 日本と自国のサービスの違いについて話し合い、全体で発表
- 6) 様々な自動販売機について動画を見る
- 7) 振り返りシートに気づきや学びを記入
- 8) クラス後、Facebook グループページに「ぜひ国に持って帰りたい日本のサービス」を書き込む（宿題）

日本での生活や業務を行う可能性のある外交官・公務員にとって、日本文化社会の理解は日本語学習と同等に重要であり関心も高い。「生活と文化」において、研修参加者は日本文化と同時に世界各国の多様な文化を学び、異文化理解の目を養い、結果として日本文化社会への理解を深めることができた。また、教室で得た知識を実社会で確認し、新たに得た気づきを教室に持ち帰って共有するなど、実体験をふまえた日本文化社会の理解を得る機会となった。

### 3.5 評価

#### 3.5.1 テスト

各学期の中間時と期末時に、「活動」で学習したいくつかの課題を口頭テストで評価した。また3学期の最終口頭テストは、「活動」に加えて「社交の日本語」「スピーチ」の3科目の学習内容を対象とし、①日本での経験についてのQA、②社交場面でのロールプレイ、③スピーチのテーマ（自国の概況や観光、二国間関係）についてのやりとりの3つを課題とした。口

『まるごと 日本のことばと文化』を主教材とした専門日本語研修のコースデザインと成果

頭テストは、複数あるテスト課題の総合的な達成度を「総合評価」として判定した。評価項目として、達成度と質的側面（文法的正確さ、語彙のつかいこなし、音声能力、流暢さなど）を設けたが、「総合評価」は課題の達成度のみを対象とした。これは、「活動」の授業目標を明確に学習者に示すためである。質的側面は学習者への参考情報として記録し、テスト後のフィードバックでチューター<sup>(2)</sup>から課題の達成度とともに質的側面についても説明を行った。

理解の学習項目は、各学期の中間時と期末時に筆記テストで評価した。筆記テストは、聴解、語彙、文法、読解、作文の各問のほか、漢字語彙については、読むことと意味の理解のみを求め、書くことは任意の課題とした。結果は口頭テストと同じくチューターよりフィードバックを行った。

### 3.5.2 ポートフォリオ

研修期間中、『まるごと』関連クラスでの Can-do チェックや作文課題、スピーチ原稿や各種課外活動のレポートなどを利用してポートフォリオを作成した。また日本語についてある程度知識を得た1学期末に自己目標を設定し、各学期末にはポートフォリオを元に自己目標の達成状況をふりかえるセッションを行い、研修終了時に自己評価を行うとともに、今後の学習計画を作成した。

## 4. 研修の結果

『まるごと』を主教材としたコースデザインの結果、研修参加者にどのような変化があったのか、また参加者や担当教師はどのように感じていたのか、テスト結果や参加者の自己評価、コースアンケート、教師へのアンケートなどの結果を報告する。

### 4.1 日本語能力

#### 4.1.1 テスト結果より

本研修では、コース終了時に言語知識と口頭運用能力を6段階に分けて評価している。口頭運用能力の評価は、3学期の最終口頭テストの結果を対象とし、上から「Excellent：難なく課題を達成し要求以上のパフォーマンスを見せた」「Successful：十分に課題を達成」「Good：課題を達成」「Fair：課題の一部未達成」「Acceptable：課題の半分が未達成」「Survival：課題がほとんどできない」の6段階に分類した。ただし下位2段階の該当者は稀で、事実上は「Excellent」から「Fair」までの4段階の評価となっている。

今年度からシラバスが変わり、その結果テスト内容も変更されているが、外交官・公務員日本語研修では従来より専門日本語研修として会話やスピーチ科目などの課題遂行型の授業を重視した最終口頭テストを行っており、口頭運用能力の評価に関しては主教材変更後もその試験

内容を踏襲した。よって、従来のテストと一つ一つの質問内容は同じではないが、テスト課題の構成は同じであり、いずれも CEFR の能力記述文にあげられている A 2 レベルの言語活動に即したものである。一方、評価方法については、従来は課題の達成度と質的側面のすべての評価項目から総合的に判定して「総合評価」を出していたが、今年度は課題の達成度のみによって「総合評価」を出している。そこで、過去 3 年間の口頭運用能力との比較をする目的で、学習者向けの「総合評価」とは別に、従来と同様の条件すなわち課題の達成度と質的側面の両方から「総合評価」を別途算出した。

その結果、過去 3 年間の平均では、口頭運用能力で「Fair」すなわち A 2 レベルの課題が一部達成できなかった者が 15% 存在したが、今年度は 2% に減少した。今年度は下位のクラスでもコースの進度についていくことができ、口頭テストでも最低限の材料で課題が達成できたものと思われる。また、口頭運用能力の 6 段階中最高レベルの「Excellent」に達した者は、過去 3 年間の平均の 23.6% に対して、今年度は 37.8% と大きく増えた。「Excellent」は、課題の要求水準を超え、テーマについてやや詳しく説明したり、会話を自ら進めたりすることができるレベルで、従来も最上位のクラスではこのレベルに達する者が多かったが、今年度は中位クラスまでその範囲が広がったことになる。今年度に関して言えば、上位クラスの口頭運用能力は従来と変わらないが、下位～中位クラスの口頭運用能力は、全体として向上したといえるだろう。また、口頭運用能力の対象となる 3 学期の最終口頭テストでは、『まるごと』の学習内容だけでなく、「スピーチ」や「社交の日本語」など、専門日本語科目の課題も扱ったが、『まるごと』の導入は、専門日本語の習得にも良い影響を与えたといえるだろう。

一方、言語知識の最終評価は、各学期の中間・期末時の筆記テスト結果の平均点から判定した。筆記テストに関しては従来のテストと問題の構成や形式が異なるために比較はできないが、達成度において「Good (70% 以上の達成度)」以上の者が過去 3 年間平均で 86.1%、今年度は 89.1% と、顕著な変化は見られなかったことを付け加えておく。

#### 4.1.2 教師の観察より

研修の中盤（2 学期中間時点）と終了時に、授業を担当した教師 15 名にアンケートを行い、「これまでの研修参加者との違い」を、また今回初めて本研修を担当した教師には「これまで経験した初級学習者との違い」について自由記述で回答してもらった。

##### (1) 話すこと、書くこと

教師 15 名中 12 名が共通して、「話すことにためらいがない」という表現で今年度の研修参加者を形容していた。「間違えないようにきっちり話すより、目的を果たすためにとにかく話すという人が多い」「準備なしで話さなければならないような状況でも気楽に話している」「正しいかどうかは別として、助詞を飛ばそうが間違えようが、活用を多少間違えようが、臆せずに

相手に意図が伝わるように話そうという姿勢が見られた」といったコメントからは、間違いを恐れず積極的にコミュニケーションしようとする姿勢がうかがわれる。書くことについても、「抵抗感がない」「Facebookなどに臆せずどんどん日本語で書き込んでいる」など、話すことと同様の印象が持たれていた。また「一番日本語能力の低いクラスでも、口頭テストで会話が破綻しない」「クラスへの参加度が平均している。よくできる人だけが話しているのではない」など、従来と比べて成績下位の研修参加者の変化をあげる声も多かった。

#### (2) 聞くこと

聞くことについても、「全部わからなくてもいいという雰囲気がある」「自然な話し言葉に対する抵抗感が少ない」「必要なことだけに集中すればいいと割り切っている」「これまではターゲットの文型以外の表現は理解の邪魔になったり、難しいと感じさせる要因になっていたが、今年は下位グループも聞き飛ばすことに慣れている」など、情報を選別しながら聞く態度がこれまでとの変化として語られていた。

#### (3) 文法の理解

一方、文法の理解については、「以前の学習者ではないような助詞の間違いがある」「上のクラスでも、復習すると、ごく基本的なところで覚えていなかったり、よくわかっていないことがあった」「動詞の活用や普通形など、体系的な理解まで至らなかった人も多かったと思う」など、不安を感じる声も多かった。一方で、「活動クラスではできるのに、理解クラスで文法説明を加えるとわからなくなるケースがあった。このようなタイプ（筆者注：文法理解が苦手なタイプ）は『みんなの日本語』の場合、苦労していたのかと思った」「連体修飾を導入した際（初級1-17課）、普通形の説明に固まっていたのに、課題では使えているので驚いた」と、文法はわからないが課題は達成できるという学習者の姿への新鮮な驚きが述べられていた。

#### (4) ストレスとモチベーション

その他、日本語能力に間接的に影響を与える要因として、研修参加者のストレスやモチベーションについてのコメントも多く見られた。「一番大きな違いは、語彙が覚えられない、文法が苦手な学習者のストレスが軽減されたこと」「一番下のクラスでも最低限の課題はできるので、モチベーションが維持できている」「話せるという実感があるからか、学習に対する不安やストレスが少なく、楽しく学習しているように見受けられる」など、特に下位レベルの参加者のストレスが軽減されていたことがうかがわれる。

### 4.1.3 自己評価より

では、研修参加者は自身の日本語能力について、どう感じていただろうか。本研修では、研修終了時に、Post Program Feedbackの時間をとり、CEFRの自己評価表<sup>③</sup>を利用して自己評価を行ったほか、自己目標が達成できたかどうかについてグループで話し合った。CEFRの自己

評価表を利用した評価結果(表6)を見ると、やりとり (Spoken interaction) については全体として自信をもっており、聞くこと、読むことについてはA2レベルを達成したと考えている者が多い。一方、産出 (Spoken production, Writing) については、自信のある層とない層にやや分かれる結果となった。

表6 CEFR 自己評価表を利用した自己評価結果

	A 1	A 2	B 1	B 2
Listening	8.3%	69.4%	22.2%	0%
Reading	5.6%	72.2%	19.4%	2.7%
Spoken interaction	8.3%	44.4%	44.4%	2.7%
Spoken production	11.1%	52.7%	33.3%	2.7%
Writing	16.7%	50.0%	33.3%	0%

また、自己目標が達成できたかという話し合いでは、それぞれ目標に差はあるが、特に会話能力について満足しているという声が多かった。

#### 4.2 満足度

研修終了時に研修参加者に対して行ったコース評価のアンケート(表7)によると、「大変満足」「満足」を加えるとほぼ100%となり、これは従来と変わらない。しかし、本研修にしては珍しく「やや不満」や「不満」も存在した。数は少ないが、学習能力の高い数名の参加者は、今年度のカリキュラムの進捗や内容に物足りなさを感じていたことも確かである。

コメントを見てみると、プログラム全体については、「私たちのニーズに合っていた」「こんなに日本語ができるようになるとは思っていなかった」と肯定的な意見が大勢を占めるが、「もっと仕事に関する内容を学びたい」「もっと文法や漢字を勉強したい」「もっとインテンシブな内容で中級まで学びたかった」という意見も見られた。

表7 研修終了時の満足度調査

	大変満足	まあまあ満足	やや不満	不満
研修全体	73.0%	27.0%	0%	0%
日本語プログラム全体	73.0%	24.3%	2.7%	0%
科目評価 (活動)	62.2%	32.4%	2.7%	2.7%
科目評価 (理解)	64.9%	32.4%	2.7%	0%

また、「活動」と「理解」のクラス活動についても意見を聞いたところ、肯定的なコメントとして「会話例はみな、日常生活に必要なものだった」「作文をシェアするのは楽しかった。世界を旅するようだった」「自分の国について紹介する機会があったのがよかった」など、『まるごと』が提供するクラス活動を楽しんでいた様子が見られる。否定的なコメントとしては「活動では語彙が制限されているのが不満」「もっといろいろなトピックについて学びたい」

『まるごと 日本のことばと文化』を主教材とした専門日本語研修のコースデザインと成果

「もっと長い読解をしたい」とより多くの学習内容を望む声がある一方、「理解はむずかしかった。混乱することが多かった」と言語知識の学習に苦勞する声も聞かれた。

#### 4.3 教師の気づき

今回の主教材の変更を通じて、教師もまた多くの気づきを得た。前述の教師アンケートで、教える側として変化したこと、これまでと違うところについて聞いたところ、以下のようなコメントが見られた。

- ・これまでは「文型が入っているかどうか」を話題にしていたが、今期は「できているかどうか」が話題の中心だった。「何を教えるか」という意識が変わった。
- ・いい意味で細かい部分の助詞や文法などにこだわらなくなった気がする。日常生活で多少間違っても気にしないレベルの部分では、授業中もこだわりすぎなくなったと感じる。普段の自身の発話も「生の会話」に近い、コントロールしていないものになった。
- ・学習者たちの学びをナビする役割に徹することができるのがおもしろい。
- ・学習者同士で会話を広げていくということは、初級ではなかなかできないと思っていたが、状況が分かればバリエーションのある会話が生まれていくものだと実感した。

『みんなの日本語』から『まるごと』へという変化は、教師にとってもチャレンジであり、新しい体験だった。そして、教材が変わることで、教師の意識や態度に変化が起これり、また学習者観にも新たな発見があったこと、それもコースデザイン改訂の重要な成果といえる。

### 5. 成果と今後の検討課題

『まるごと』の導入によって、下位レベルの動機付けや研修開始時の文字学習の負担感、研修中のストレスなど、従来の外交官・公務員日本語研修の問題点は解消された。また、中位下位レベルの参加者の口頭運用能力について一定の成果が見られたほか、「ためらいなく話す」「目的を果たすためにとにかく話す」「要点だけを聞こう、読もうとする」といった課題遂行を重視する姿勢が明確な変化として現れた。これは、『まるごと』という教材、Can-doを目標とした授業、そして課題遂行に重きをおく評価によって、言語知識を得ることではなく、それを利用してコミュニケーションすることが重要だというメッセージが学習者に伝わった結果だと思われる。また、このような変化は、外交官・公務員の業務に直結する「スピーチ」など専門日本語の学習にも良い結果をもたらした。

日本文化社会の理解についても、トピック別の主教材を使うことで、生活文化事情を授業の中で積極的に取り入れやすくなったほか、「生活と文化」のクラスを通じて、日本の文化社会の理解の上でこれまで落ちていた日常生活の中の文化が補われ、文化社会理解のカリキュラムがバランスの良いものになった。また「生活と文化」では、多国籍・多文化であるグループの

特性を活かして、日本事情について多様な視点からの観察が可能となった。

一方、今後の検討課題は、上位レベルの参加者のカリキュラムである。今回『まるごと』関連科目に多くの時間をかけたため、漢字や専門語彙などのシラバスを従来から一部削ることとなった。上位レベルの口頭テストやスピーチクラスのパフォーマンスを見る限り、アウトプットの質は維持されているがインプットの量は減っており、それに物足りなさを感じていることも事実である。今後、単にインプットする知識の量を増やすのではなく、業務や生活に役立つ課題を目標として必要な言語知識の充実を図り、参加者の学習意欲に応じていきたい。

本報告は『まるごと』導入1年目の記録である。今後回数を重ねていく中で新たな成果と課題も見え、その結果カリキュラムの修正と評価をくりかえしていくことになると思うが、そうしたコースデザインのプロセスを、今後も記録し報告していきたいと思う。

#### 〔注〕

- <sup>①</sup>ウェブサイト「まるごと+」にある、視覚的連想法による漢字の形と意味を覚えるためのアニメーション。
- <sup>②</sup>研修参加者1人に1人ずつ担当教員がつき、個別に学習相談や生活相談を行っている。
- <sup>③</sup> Council of Europe 「Common European Framework of Reference for Languages – Self-assessment grid」を使用。  
<<http://europass.cedefop.europa.eu>> (2016年8月15日参照)

#### 〔参考文献〕

- 上田和子・羽太園・和泉元千春 (2001) 「専門日本語教育のプログラム・デザイン—外交官・公務員日本語研修における選択システムの実践—」『日本語国際センター紀要』第11号、69-87
- 来嶋洋美・柴原智代・八田直美 (2012) 「JF 日本語教育スタンダード準拠コースブックの開発」『国際交流基金日本語教育紀要』第8号、103-117
- 羽太園・上田和子 (2008) 「「初級からの専門日本語教育」への視点—関西国際センターの実践研究から—」『国際交流基金日本語教育紀要』第4号、41-54